

すべては、「私」にかえる

田村玲子

私は昨年の4月に、自由保育という形態をとるこの幼稚園の保育者として、社会への第一歩を踏み出しました。頭の中では「自由」という2文字ばかりが、大きく美しく輝き「ジュウ、ジュウ」とうねりを上げながら回っていました。その時私は、人間として身に付けて行くべき生活習慣や規律や感覚などが、私がこしらえた「自由」といううねりの外

に放り出されて行くのに気がきませんでした。けれど、このことこそが、私の保育における失敗の種となったのです。

私が4月から行って来た保育が、どこかおかしいなと漠然と気がき始めてからも、それでは何がいけなかったのか、どこで間違えたのかがはっきりとわからず、様々な価値観からみ合う茂みの中を、かき分けかき分け歩いて来ました。そして2月のある日、私はやっと自分の失敗の種を知る糸口を見つけたのです。日本保育学会会報 第77号の村山貞雄先生の「成長中心主義と保育技術の努力」でした。その中で村山先生は『成長中心主義』とは、子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重して、子どもをスクスクと成長させることを教育作用の中心に置こうとするものである。すなわち子どもに生まれつき自然のプログラムとして組まれている成長に対してこれを邪魔するような障害を取り去り、成長という働きが充分に行なわれるような環境を与えることを教育の主目的としている。』と述べておられます。恥かしいことに私は、3回程読んでからやっと、成長中心主義というのが、今、私の行なっている自由保育なのだとわかったのです。それほど、私の自由保育に対する理解は、無に等しかったのです。

私は『子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重し』ようという意識はして来ました。しかし、子どもを『成長させ』て来たでしょうか？『成長という働きが充分に行なわれるような環境を与え』て来たでしょうか？ 私は、子どもが生まれつき持っている成長の意味とその働きを尊重し、壊すまいとする余り、私が子どもを成長さ

せ、成長のための環境を与えるのだ」ということについて、非常に無意識だったので。村山先生の言葉をお借りすれば『保育について受身になり』片手落ちの保育をして来てしまったのです。

そこで私がこしらえてしまった「自由」の意識の下でおかして来た失敗について、具体的にあげてみたいと思います。

I 子どもについて 自由とは子どものすべてを受け入れること。

○子どもたちも大分、園の生活に慣れて来た5月。○君がままごとコーナーのタンスのひき出しを全部とり出し、外ワクだけを部屋の中央に運び、その中に潜り込んだ。そばにいたA君たちも加わり、今度は外ワクを横向きにねかせて「バスだ」と入り込み、他の子どもがそれを引っ張った。——私はまず「あんな使い方をしたらタンスが壊れちゃう。困ったなあ。タンスをああい風に使おうっていうのはどうなんだろう？」と思った。けれど、友達と共に遊び、共通の楽しみを見つけたことの意味や、タンスをタンスとしてではなく、バスに見たてた発想の大切さを思い、また子どもたちがあんなに楽しんで遊んでいるのだから…と、私は最初の疑問を胸にしまい込んで、子どもの遊びをニコニコと見ていた。

○やはり同じ頃、M君が生き生きとした表情で登園し、部屋に友達の様子を見つけると、靴を脱ぎ捨て一目散にかけ寄って、ふざけっこを始めた。——私は「あれ、靴が…」と気にしながらも、M君が靴のことを忘れてまで友達との朝の触れ合いを楽しめるように

なったことの意味を思い、またせっかく子ども同士つながりが生まれて来たのに、私
が声をかけることで、それを中断させては……と靴のことはそのままに、子どもたちの
様子をうれしく眺めていた。

私は、子どもの遊びや行動の意味を尊重して行くこと、これこそが自由保育だ！と思い
込み、それと並んで大切にして行くべきものを切り捨ててしまいました。けれど、どちら
も大切なものだったので。こちらを選ぶとか、あちらを切り捨てるということではな
く、両方の大切なものを子どもに入れていかなければならなかったのです。

例えば、ダンスをバスに見立てた発想を認めながら、「ダンスでは困ること」を伝え、
他の素材を与えてみる。また、友達とふざけたい気持ちを受けとめながら、友達と一緒に
靴に気付いて片付けられるような言葉かけや関わりをしていく。これが保育者である私の
役目だったのです。

2 自分自身について 自由というのだから……そのままの自分で良いのだろう。

○2月のある日、私は他の先生からの指導を受け、他のクラスに紛れこんだまま少なくな
ってしまった自分のクラスのブロックを集め直した。減っていることを知ってはいた
が私はさして問題を感じないいたのである。ところがブロックの数が元にもどったそ
の日から、ブロックの回りの光景がガラッと変わったのである。数人の子どもがブロ
ックのたくさん入ったカゴを囲んで、様々なものを作り出して行く。今までの少ないブロ
ックからは想像もつかない程の大きなロボットやピストル、汽車など。そして1人1人

の子どもによって作られたそれは「合体しようぜ」という声と共に、更に大きく長くな
って行った。昨日までとはうって変わってブロックたちがキラキラと輝いて見えた。そ
して私は、自分の環境設定が不充分だったために、子どもの成長に気付かず、子どもが
その力を出し、広げて行く場を奪っていたことに気付かされた。

私は、私生活の中でも整理整頓が苦手で、部屋の中が雑然としていても「別に困らない
し、この方がかえって落ち着くわ」などと思ってしまう。一言でいえば、だらしがな
いのですが、整然とした美しさに対する意識や感覚が非常に低いのです。ところが、私が
こしらえた「自由」の2文字は、私自身の中にも都合のいい様に入って来て、自分のマイ
ナス面さえも「それがありのままの私なのだから……」と筋違いに自分自身を説得し、納
得させてしまったのです。子どもについて、すべての状態を受け入れることを自由と思い
込んだ私は、自分自身についても、そのままの状態を認めることを良し、とってしまった
のです。

そのため、私の保育室の中は雑然とし、どこか殺伐としていました。そして恐しいこと
に（当然のことながら）、私が作り出した部屋の環境は目に見えない感覚的なものとして
子どもに入り続けて来たのです。また、先のブロックの件で述べたように、十分な環境が
ないため、遊びが子どもの実際の力よりも下の段階でしか現れず、それ以上は広からな
ったのです。

クラス的环境設定や運営も各担任に任せられる、という自由保育の中で、その自由を与

えられた私たち保育者がどれだけ大切な役割を果たすのか、どれだけ責任があるのかを、実感として思い知らされました。私自身が自由であるからこそ、反対にどんな小さく細かいことをも意識していかなくてはならないのです。

今年1年間の失敗を振り返って、もう1度自由保育の“自由”とは何か、自由だからこそ大切なものは何なのか、それを保育の中でどう子どもたちに伝えて行くのかを、考え始めて：今、それらの問題点を解いて行くには、1つ1つの小さなものに対する感じ方、こだわり、価値観など、すべて自分自身にかえてくることを改めて思い知らされています。私が生まれてからの21年間で得て来た様々なものが、すべて保育を通して子どもに伝わってしまうのです。自分の保育を見つめるということは、そのまま自分自身を見つめるということなのです。私生活で部屋を雑然とさせている私が、いくら保育室だけは：とがんばってもいつかは無理が来るでしょうし、毎日のちょっとした所でいつもの雑然さは、顔を出してしまうでしょう。保育をより良く豊かにするためには、自分自身をより良く豊かにする……すなわち毎日の生活の中で、自分の持つプラス面を伸ばし、マイナス面を改良し、足りないものや新しいものを吸収していかなければならないのです。そして、それができるのは他の誰でもない、この私だけなのです。

（私自身の誤った自由のとらえ方とその影響について、自分なりに考えて来ました。

諸先生方のご指導をいただければ幸いです。）（横浜学園付属元町幼稚園）